
クラゲと俺とドラゴン先生

真坂 哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラゲと俺とドラゴン先生

【Nコード】

N3632Z

【作者名】

真坂 哲也

【あらすじ】

クラゲと融合してしまったシンは、異世界に来ていた。ドラゴンに会ったり、モンスターと戦ったりしながら冒険するのです。

文章を書くのが始めてなので、解りにくい所もあると思いますが、よろしく願います。

第1話 ドラゴン先生そりゃないよ

俺は大学の研究の為にベニクラゲを採取しに漁船に乗って海に出た。

ベニクラゲ、別名「不老不死」のクラゲと言われる、ちなみに5mmくらいの大きさ。

ちょっとした肌の若返りの薬でもできれば、大儲け間違いなしだ！なんて思って研究課題としたのだ。

ベニクラゲを大量に採取して、帰ろうと思ったときエンジントラブルで潮に流され遭難してしまう、岸も見えなくなり、かなり沖を漂った拳句嵐に遭って光の渦に飲み込まれてしまったのである。

消え行く意識の中、体の細胞がバラバラになりベニクラゲと融合しながら溶けていった。

そう彼は異次元の世界に、魔法や怪物の住むファンタジーな世界に流れてしまったのだ。

「痛て〜」

なんだなんだと考えながら周りを見渡す俺、大きな岩山が見えるが後は天然林みたいだ。

確か海で嵐に……どう見ても森だよな……まあ生きてるしいいか。

目の前の物に目が留まる。

おっ……

あれ???

俺だよな???

しばらく眺める。

「ひいひいー俺が死んでる」

目の前には俺の死体があるよ。

ショックで放心状態……30分くらいたって死んだ俺をそろりそろり調べる。

つつん、くんくん、ポコポコ!?うむ、変な音だな、これは!!

<<検証結果>>

抜け殻だった……背中のに割れ目があり、中が空っぽだった。

「うおお〜、見てはいけない何かを今見てるぞ……たぶん」

セミの抜け殻みたいに……かなり肉とか付いてるけど……あう！まさか、俺ってセミだったのか、それとも蛇だったのか……しばらく考え……まあいいか、なんとかなるさと笑い。

<<結論>>

クラゲと融合したのは現実だったと決める。

ベニクラゲは老化現象が始まると、細胞が若返る現象がおきるが……正確には不老不死ではない、死んだら終わりだ……ベニクラゲ普通に魚に食われてるし。

ただ老化しないだけだから、たぶん今回は死ななかつただけ運がよかつたのだ。

俺の抜け殻を見ればわかる、生身なら全身打撲で死んでるのは間違いない。

体を見ると傷一つない、気がつかなかったがかなり若返ってた。

俺の抜け殻から服を取り着る、服がでかすぎだ……がーん、背が縮んでる、20歳から12歳くらいになってる……まあいいか一人だし。

落ち着いてまわりを見渡すと100m先の岩山の裾辺りに船を発見、船の中に食料や水などもあるはず。

「つやつほい〜」

叫びならダッシュする。

10mくらい岩山を駆け登り船を調べる、あるある非常食や水は無事だ、とりあえず助かった〜と水を飲みながら、これからどうするか考え、俺の抜け殻の墓を作ることにする。

船の中から掘れそうな物を持って岩山をさらに登り、眺めの良さ

そんな場所に墓を掘る、

「結構疲れるな……しかしホント不思議だよな〜」
とく俺の抜け殻を遠くから見ると

後は運んで埋めるだ……

「げえっ、なんだ、ひいひい〜」

食べられてます。

俺の抜け殻……森から虎や狼らしき化け物が出てがつがつと食べています。

ガクガク震えながら岩と岩の陰に身を隠して眺めてると。

ドカーン！

ビクっひいひい

ものすごい音が……

背後からドラゴンが現れく俺の抜け殻を丸のみ。

「さよならく俺の抜け殻を達者でな〜」

声が聞こえたのか？ドラゴンが振り返り、こちらに向かってくる。

やべ〜見つけた。

俺を見つけると目の前で止まり命令された。

「しばらく眠る その間ドラゴンの巣を守れ」

そう言い放つと岩山にあった大きな穴のに入って行くのだった。

「了解であります」

……無理ですが、戦死の覚悟をします。

なんてことだ、いきなり守れっていわれてもな〜正直生きていけるかもわからない。やばそうな猛獣いたしな、生き残れるのだろうか？。

サバイバルが始まった。

船の中を物色する、2Lのペットボトル10本、非常食約10日分、簡単な料理道具いろいろある。カセットコンロもあるがガスがすぐ尽きるだろう。操縦席の前には小さな部屋もあり寝泊りできそうだ。

家から背負ってきたバックパックに着替えやお泊りセットまである。船は小さな漁船だったので三角帆と大きな帆の屋根があり、ロープは沢山ある、屋根は改造して生簀いけすに雨水がたまる様にする。

人がいないか3日間探したが誰もいない……兎などの小動物がいるので狩を始める。

岩山の周りで狩をするが……無理。

「早すぎだぜ、絶対取れないな……そうか罨だな」

落とし穴や怪しい罨を大量に作り、棍棒を振り回しながら兎などを追い回す。たまに運良く罨にかかるのだ。

どうもドラゴンの巢の近くには猛獣いないみたいだ。初日に見たがそれ以外痕跡もない。ウサギの皮を剥ぎ取り肉を取り出す。実際にやると結構つらかったが、すぐになれた。

この毛皮で服でも作るか……とりあえず腰巻なるものを作った。

なかなかしつくりくる、気に入った、これは貴重なコレクションとして大切にしよう。服は大きくなったら着ようと大切にしまった。

サバイバル生活は薬草や食べれる木の実やキノコなどいろいろ知識が増えた。

なぜなら毎日怪しい木の実やキノコを食べ、毒にあたり、腹をくだし、痺れるなど、俺自身で人体実験を繰り返したからだ！！ウハ八。

その時俺は気がつかなかったが、あらゆる毒に対しての免疫がついていくのだった。さらに軽い怪我や傷は意識すれば、一瞬で治ることがわかった、きつとクラゲ効果だ。

1月が過ぎる頃には、原始人のような生活になっていた。

「うほっうほっほほっい」

軽快に走りながら叫ぶ、このウサギの原始人パンツは実にいい出来だ、と言いつつ聞かせながら、出来ればヒョウみたいな毛皮がほしいが、あんなのに出会ったらまず死ぬね。

棍棒片手に近場の森を探索していると、騎士らしき遺体を見つけた。

おお！！人がいるのか……一人ではないんだ……人に会えるかも知れない。喜びと、今までの変人な行動を見られたのではないかと焦り辺りの気配をさぐる。

「よし、誰もいないな」

周りに誰もいないのを確認し、遺体から武器や防具など装備品を手に入れた。

「お〜これがロングソードか」

と映画で見た、騎士の真似などしながら素振りをする。

「これで戦えるな、戦いたくないけど、ピンチにはなんとかなるはず」

この日から生活が変わった。

原始人を卒業したのだ。

それは人に会えるかもしれない希望。

運がよければ美人な女性なんかに出会えるかもしれない。

この妄想が日に日に巨大化して今では

「俺の名はシン、異界より着たり。ドラゴン先生の巣を守る勇者である」

と「万が一」人に出会った時のセリフを考えたりしてる。

1月前はドラゴンを見て恐怖に怯えていたが、ドラゴンに（先生）を付ける事で親近感をもたし、恐怖を克服したのだった。

さらに美女と同棲する可能性も考え、倒木を切り家作りや、柵を作る作業に没頭した。

夢のマイホームが出来そうな頃、まー倒木を蔓で結んで作った原始的な家だ、小屋のほうが正しいのか。

「まーこの作業も後数日で終わるな、次はベットだな」

と休憩していると背後で「がさがさ」と音がした。

ビクク!?

なれた手つきで剣を構え辺りを探る。

「俺の名は……!?!?」

なんだ犬か……小さな犬であるが、かわいくない

「やるのか、おお」

敵を威嚇し俺の縄張りを主張する。

襲ってくるのか、武器を構えてしばらく様子を見るがそうでもない。

ふっ脅かしやがって……と犬など無視して作業をすすめる。

夕方近くまた「がさがさ」と音がする。

ビツク……

剣を構えて待ち受ける。

また犬が現れ今度は、子豚みたいな獲物をくわえてのんきに歩いてる。

なんだあれば、うり坊か！？この周りで見たことがない。

実にうまそうだ、やるしかない。

俺は容赦なく犬に襲いかかりうり坊を略奪する。

「うめ~~~~この肉最高だわ」

と大満足しながら食べてると、物ほしそうな顔の犬が近くで見てる。

ふと略奪を思い出し、すまなそうに肉を半分投げると、がつつ食べていた。

「気に入った、よしお前を弟子にしてやろう」

と決めクロと名付けた、真っ黒な犬もどきだからだ。

同じような感じで 猫もどきも現れそいつはシロと名付けた。シロとクロはたまに小物をくわえて現れる。それを奪って料理し半分を返す、罠で取れた獣がいる時は分けてやったりした。

いつのまにかクロとシロが家に住み着き3人暮らしになっていた。

なんて偉いやつらだ、もう狩などしなくてすむかもなと喜び料理するのだった。

ある日クロとシロをよく見たら、狼と虎系の魔獣だとわかった。

きつとく俺の抜け殻を食べた、あの猛獣達の子共だろう……考えたら恐ろしかったが、仲間なら心強いと思い、かわいがる事にした、かわいくないけどね。

「愛があれば、言葉なんていらさないさ」

なんて考えながら剣の素振りをしていると、クロがからかう様にやってくる。

めちやめちや馬鹿にされてる感じだ、俺様にも我慢の限界があるぞ。

「よかろう、稽古をつけてやる。師が弟子を思つのも愛だああ」

と言い放ち棒切れをもって、襲い掛かる。

「いざ 勝負」

めっちゃめっちゃ素早い、棒切れは空をきるばかりだった。

この日から毎日の稽古は剣から木刀に変わり、クロやシロと訓練するようになった。

人に会うことも一度も戦う事もなく、半年が過ぎた。

「クロ勝負じゃ」

叫びながら相手を探る、朝の稽古だ。

いきなり背後でドーンと音がする。

まさか……いやな予感がする落ち着いて振り返る。

ドラゴンの巣から、かなり小さくなったドラゴン先生が出てきたのだった。

「おい小僧、我が名はサンダードラゴン、今より契約を結ぶぞ……我が名を呼び 契約すると言え」

いきなり命令される。

「はい先生、ドラゴン先生と契約します、お願いします」

と返事をして怯えまくる、奴隷人生のはじまりか……終わった。

「よし契約はなった、では森のほうに行き我を召還してみよ 我が名を強く念じ呼び寄せるのだ」

「わかりました」

と叫びダッシュで森の奥に駆け込む、ミスったら確実に殺やっつけされる。

ドラゴン先生ここにきてくださいと強く念じ叫ぶ

「ドラゴン先生 来い!!」

ドガーン バチバチバチ（電気の音）

ドラゴン先生の回りの森が広範囲に吹っ飛び 稲妻が渦巻いている 大きさも初日見たよりでかい

「やっと 力を獲た…… 感謝するぞ小僧」

ドラゴン先生の話では、お前の抜け殻は高濃度の魔力の結晶であり、食べれば1ランク上の力が得られたが、なぜか細胞が若返りだした。

細胞の活性化が止まらずどんどん若返っていく、1000年以上生きていたドラゴン先生は役半年ほど

若返りの時間が必要だったらしい。

若返りの原因がお前の魔力を見てわかったらしく、契約すれば若返りが止まり最高の状態の体になる事も予想できた。

簡単に話せば、60歳の人が若返り過ぎて5〜6歳子共になり、そのまま年を取らなくなってしまう。

原因の者と契約すれば若返りが能力のピークの時（20歳くらい）に安定するのだった。いつのまにか、俺の体も18歳くらいに戻っていた。

普通なら召還者はかなり高い能力を必要とするが俺の抜け殻を食べたので、その力がドラゴン先生に宿り、俺と共鳴してるらしい。

ドラゴン先生と契約はしたが、もちろん命令されるのは俺だ……しかも召還するのに、でかすぎて屋外でないと無理らしく、召還時サンダープレスなる物を発動するので、もし人や建物があれば吹き飛んでしまうだろう。

くだらない事でドラゴン先生を召還したら、激しく怒られ恐ろしくて召還できない事もわかった。

先生 結局……使えないじゃ……

第1話 ドラゴン先生そりゃないよ(後書き)

よろしくお願いします

第2話 隠れ家

ドラゴン先生の話ではシロとクロも俺の抜け殻を食べているらしく契約できるとの事だ。

俺は、我が弟子なら思う存分命令できると思い早速契約をした。

「クロ、シロ。召還」

クロは真っ黒い陽炎のような狼に、シロは真っ白い白虎になった。

「ほー、影狼に白虎か」

ドラゴン先生の話では、種族最強に近いらしく、普通召還出来る物ではなく、人になつく事もない。危険な魔物の名に入るらしい。

クロは見た目からやばそうだが、シロは見た目は堂々とした白虎だイメージ通りだ。

恐ろしいが、とりあえずシロから馴れていこうとシロの頭を撫でながら。

「クロ シロよろしくな」

と笑顔で挨拶。

「がお~~~~う」

シロが胸を張るように咆える。咆哮です……痺れて動けません。

(咆哮とは咆えて相手を威圧し麻痺させるスキルです)

謀反だ、明らかにわざとだろ油断したぜ。

正直、怖すぎて馴れるまで(咆哮とかも合わせて)にかなり時間がかかった。

次は騎乗の練習だ、馬に乗ったこともないのでひたすら練習だ。

最初はゆっくり歩いてもらいなんとか乗れる程度だったが、今では結構乗りこなせるようになった。

クロとシロを引きつれ森を探索するが魔物などさっぱりいない平和な森だ。

騎士の死体があった場所を重点に探す人に会えるかも知れないからだ。

シロの背中に乗り森を走っているとクロが突然走り出す。

「ぎゃーー」

遠くで女性の悲鳴が聞こえた。

ついに出会いキターとダッシュで現場に向かう。

クロの前に化け物がある。人型だがまさに狼だ、これが人獣なのか？

おびえてる様だが何かを叫んでる。仲間を読んでるのか……？

「女性をを何処にやった！」

！？
周りを探るが他に誰もいない……血痕もないから連れ去られたか

！？
剣を構えて人獣を威嚇する、人獣は私の剣を見たとき力なく座
つて何かを言ってるが、さっぱりわからない……シロほえる！

「がおおおお」

突然の咆哮で気を失う人獣、船にあつたロープを取り出しグルグル巻きにして逃げない様にし、周りを探索するが足取りがわからない、ドラゴン先生のところへ連れて行くしかないか……先生なら言葉がわかるかも知れない。クロが人獣を啜え、先生の所に戻る。

「ドラゴン先生……大変だああ……」

とあわてて走り込む……ハアハア

「女性がさらわれた、早く助けなければ……」

早口に状況を話す……大切な出会いなんだと真剣に。

めんどくさそうに振り返るドラゴン先生。

「言葉か、忘れておつたのう……ま……あわてるでない。その女を
起こせ」

女って……周りを見ながら人獣の事だとわかる、焦る俺……まさか勘違いか！？

ドラゴン先生が呪文を唱えてる、通訳の呪文らしい。

人獣を起こすと、ドラゴンを見て泣き叫けぶ。

「食べないでください。何でもしますから命だけは……」

「これで良からう、シン後は人狼と外で話せ」

言葉を理解した俺を確認し、弱みを握った様にニヤリと笑う。

外に連れ出し人狼と話す。

「お前な〜人狼つてのは、もつと、かわいらしくだな、耳がピコつてついて、もつと愛着が沸くものなんだよ。胸もでかくてだな。スタイルもよく、ぶつぶつぶつ……あああなんて事だ」

勝手に理想を話落ち込む俺……ああ君が悪いわけでないよ、判ってるこの世界に少し絶望したのだよ。

「もう家に帰っていいよ、君は自由だ!!」

かなり凹でる様で顔も見えてない、そんな俺に切羽詰った用に話かけてくる。

「あの仲間が死にそうなんです、お願いします。助けてください」

「どんな化け物に捕まったのだ？」
やる気ねーオーラがでまくりだ。

「化け物ではなく、病気なんです」

「はい！？何人くらいだ」

「20人ほど、急がなければ死んでしまいます。何でもしますので」

「分かった、助けよう。しかし君の命は今日から私がもらおうのか？、君の名前は」

「わかりました、私の名前はサラです」

見た感じ彼女はかなり強そうだ俺にはわかる、よく見ればワイルドな顔が怖すぎるぜ。恩を売れる時に売っとけ、この森で生き抜く為には護衛なかもがいなくてはな、最高の右腕になつてくれるだろう。

「俺はシンだ、一つ聞くが俺が行ったら間違えて食べられる、なんてないよな？」

「大丈夫です、動ける人はほとんどいませんし皆、女性です。ちゃんとピコって耳がついてる人もいますよ」

「なんだって〜、ゲフン、そうか、そうなんだ。サラは、戦闘系なのか？」

「やっぱいるんだ、出会いだ出会い、よかったぜ。」

「私はまだ生まれて若いのでランクが低いのです、上がればピコって耳になりますよ、戦闘は弱いですが……戦闘系ってなんですか？」

「サラにピコ言われてもまったく創造できないのだが。」

「なんだって！！戦闘できないのか……まあいい。ピコには何年かかるのだ？」

「周りの話しでは早くて10年とか平均30年かな？」

聞いた俺が馬鹿だった、その頃は死んでるさ。コックとして生きてもらうか、飯しだいか不器用そうだがまあ後で考えよう。

「ドラゴン先生に話してくる、その家に薬草があるので準備してくれ」

俺はドラゴン先生に助けに行くと話すと、この奥に水が沸いてるから、その水とく先生の抜け殻があるんでその肉を持っていけと……先生も脱皮したんですね……共鳴シンクロしたってこれですね。俺も化け物になったと思つたよ、分かる分かるよ。しかもく抜け殻、邪魔なのでくれるらしい。

ドラゴン先生の寢床から少し奥に行くとかなり広い空間があり冷える、冷蔵庫の中にいるようだ。

この部屋は半人口的で天井や壁の上部の隙間から光が入っている。広間の奥に大きな岩がありそこから水が湧き流れ出している、岩を伝い流れた水は水路にあつまり大小の水溜りを作り壁の奥に流れて行く様だった。

この広間に先生の抜け殻もある……生きてるようで恐ろしいが剣で内側から肉を少しそぎ取り、不思議な水もペットボトルに入れる、たぶん何かの効果があるのだる見た感じから怪しい、回復だろうな。2Lのペットボトル2本と肉3キロくらいをマストの帆だった布にくるみバックパックに詰め込む。

クロにサラを乗せ俺はシロにのる。

大体の場所を聞いて出発する、東側の岩山に沿って森の中を2時間近く走ると、見上げるばかりの断崖絶壁がある、そこらしい。近くまできても何処にあるか分からなかったが、サラが指差す場所に小さな洞穴がある。

「あれが隠れ家です」

入り口の近くに来ても人の気配がない、武器を手に警戒しながら中に入り周りを見渡す……絶句。

全員死にかけてます・・・獣人？やら見たことない人種？がいた。バックパックからペットボトルを取り出し、重症な人から少しづつ水を飲ませる。かなり楽になるのかうめき声などはなくなった、表情も落ち着いてきている。

よく見たらサラも苦しそうだ、水を飲まして。

「お前も寝ている」

薬草を探しにいく、胃腸薬系だ。思ったより重症だ、病人にいきなり強い薬は逆効果と昔本で読んだことがあるからだ。適当に薬草を取り戻り台所らしきところでドラゴンの肉をミンチにしてさらにつぶす。

これなら飲めるだろう……残ってた水との2Lの水に薬草を入れ、肉を小さじ半分くらい口に入れ水を飲ます。

全員の食事が終わる頃には暗くなっていた。顔色も良くなってるみたいだから安心して、あまった水と肉を置き。シロに洞窟を守っ

てもらおうことにしてドラゴンの巢に戻ることにした。

クロに乗って戻る、帰りは飛ばして1時間で着いた、今日の事を先生に話す。

「うむ上出来じゃ、あの人獣を見れば病だとはわかったが、そこまで酷かったのか、死臭もしてたしのう」

先生の話だと、普通ドラゴンの肉は鮮度が落ちない、栄養満点のめっちゃうまい肉だが、この抜け殻の肉は特別らしい。先生が調べて分かったのは、俺の抜け殻効果によく似てる。高濃度の魔力、能力UP、若返りや寿命効果、怪我や万病にも効果絶大。

先生も気が付かなかったもう一つ特別な効果がある。

それは、惚れ薬だ。

5〜6種類の薬草と混ぜ合わせると回復効果が上がるらしいので明日取って行くことにして準備する。
持っていくを取り水を10L用意、ついでに俺たちの食事もドラゴンの肉と決めたので肉15kgくらいにした、シロとクロが大量に食べるから。

明け方から森に出て薬草を取り昼前には隠れ家についた。中から話し声が聞こえる。

「失礼しまーす」

中に入って超びっくる、座って話ししてるし中には歩いてる人も。

「「「あつ シン様 ありがとうございます」「」「」

全員感謝や尊敬の眼差しで深々と頭を下げる。

「ああ良かった、大分元気になりましたね。昼飯の材料持ってきたから皆で食べよう」

すごい回復に思わず胸をなでおろす。

少し照れながら逃げるように台所に向かう、感謝されるのに慣れ
てなくはずかしいのだ。

台所に行くとは絶句……

めっちゃめっちゃ美人な女性が出てきた……

「あ、シン様おはようございます」

「お、おはようございます」

ペコリと頭を下げる俺

「あ、緊張しなくていいですよ、サラです」

「ええええ~~~~~」

サラの話では、夜、体に変化があり能力がかなり上昇しランクアップしたらしい。めちゃかわいい……シルバーの髪に白い肌、三角の耳が頭のピコって付いてる、いや……もう、縛ったりしてすいませんでした、神様に謝る。

サラに昨日の話を聞くと、昨夜遅くには容体がよくなったので、もう一度全員に軽く夜食を与え朝症状の重い人を優先に食べられるだけ与え残りを皆で当分で分けて食べたらしい。

バックパックから水を取り出し、泥棒袋の様にかついでた布袋からドラゴンの肉を取り出し適当な大きさに切り薬草をすり込む。ミンチにしようと思ってたがすっかり食欲も回復してるみたいだから飲み込みやすい大きさに切ることにした。味見したらめっちゃ美味しいシロとクロにもお裾わけして、あまったら山分けだぞつと約束する。

「よしやく飯できた 腹一杯食べてくれ」

皆の所へ持つていく……食べる食べる、あの病人だったよね？ 15kgが見事になりました。

人獣達すげー！！

「シン様、お話があります」

サラは意を決した様な顔で話しかけてきた。

サラの話では1年前、帝国がドラゴン討伐の為 大規模な兵をだしてこの森に進軍した。

結果は散々たる敗北で軍は尻尾を巻いて逃げたらしい。ドラゴン

討伐の為、多くの奴隷が借り出され、その中にサラ達もいたのだ。男達は前線に借り出され、戦えない女や老人などは食料や資材を運ぶ役目に回された。

サラ達が前線のキャンプに着いた時ドラゴンの襲撃に出会い、勇敢に戦った者は全滅し貴族や将軍達は皆我先に逃げ出してしまった。残された奴隷たちは何とか助け合い戦場を逃れそれぞれの故郷や主人の元に帰っていき、帰りたくない者や怪我をして動けない者だけが残ったらしい……。

そして、今の隠れ家を見つけ、ドラゴンから隠れる様に暮らしていたが、数日前から原因不明の病にかかりあつと言う間に全員感染してしまったのだ。今回シン様に助けられ皆覚悟を決めたらしい、脱走兵として国に突き出せばそれなりの褒美が出るし、ドラゴンの生贄として出してもかまわないと。

そんな事しないから、大丈夫ですと話すが信じてくれない……結局こちらの身の上話もした。難しい所は記憶喪失って事で、ドラゴンの巢を守っている事や帝国の人間ではない事。

「では その剣は？」

拾った……この剣が帝国の騎士の紋章があり帝国の人間だと思われたみたいだ。それならシン様の奴隷になると言って皆さん聞かない。サラはいい、その他はだめだ!!

「ドラゴン先生に聞いて許しが出たらいいよ」

と話その場は去った、先生も嫌がるはずだ間違いない!!

家に帰って、早速先生に聞くと

「お前の奴隷だろ、好きにしろと」
ってマジですか!?

困った、俺は見たのだ。たしかにピコっついてた、しかしもう、おばあちゃん、いや老婆だ。考えて見てくれ、ガリガリに痩せて病気の老婆が生肉にくらいつく姿を……背中に冷たい汗が流れる。

エロレベルで話すと、俺の最大でも熟女までた。これでもかなり厳しいのだが、あれは完熟を通り越して干しブトウ? いや干婆だ………しつけの厳しいご老人達が、俺とサラの愛の生活に邪魔をするはずだ。

黙って見てるはずがない……こんなジャングルで礼儀やしつけなんて真つ平だ。

鼻がよく効くやつらの前で臭い屁を出すのは聞きそうだな。まずはこれで行くか。

断る言い訳を100個ほど考え俺は寝た。

第2話 隠れ家（後書き）

よろしくお願いします

第3話 引越し

朝起きて気が重いが獣人達の隠れ家に向かう。

住民は人狼とドワーフがほとんどで、後シャドウってのが1人いた。

人狼は、老人でも人間の何倍も力があるので、荷物運びとして連れてこられたみたいだ。

ドワーフの人達は主に武器や防具の修理、薬草の採取やコックをさせられていたらしい。

シャドウは隠密部隊なのか分からないが誰もよく分かってなかった。ただ怪我がひどく動けない状態だった所を助けられたらしい、今もほとんど動けない。見た目は髪が黒く肌も黒い目と口だけが赤かった。

妖艶だが危険な香りがする、怪しすぎです、ステラさん。

「どうやって断ろうか……」

洞窟の風上で……ふうふうと少し屁を出しその毒ガスを素早くつかみ鼻でコブシを開く、にぎり屁だ。うお、臭い……マジくせ……、今日のは過去最強クラスだ、威力抜群だ。風上だから人狼達はすぐ気がつくだろう。

音もしない……あれだ特攻するしかないな、武田信玄の風林火山で行こう。

風の様に入って、林の様に毒ガスをまく、奥地につた頃には、火の様にガスが鼻を襲う。敵意の視線が俺に向かうが山のように受け止め、君達は自由だ俺は俺の道を行くと不適に笑い残りのガスを出しながらさっさと行く。

最後にサラお前は別だと抱き寄せ消える。やってやるぜ！！

風のように素早く隠れ家てきじゅんに入る……てくてく

「おはよう」

「「「おはようございます」「」」

うむ、やはり気が付いていたか、俺は挨拶しながらスカシ屁を垂れ流す……食らえ毒ガスを……ウハハハ

……反応少ないな……グエなんだこれは

<<数分後の診断結果>>

はつきり言つてこの狭く薄暗い隠れ家は汚なすぎた、自然の洞穴に手をくわえただけなので、ゴミや食事の食べカスが見えない場所に溜まり悪臭をはなつてるし、隠れて生活してたから皆汚いこれじやー病気にもなるよ……ここに住むなら10cmは綺麗な土を入れ換気扇とかつけたいくらいだ。昨日はマジあせったからそこまで気が付かなかつたが、酷かった。

入り口近くにいた人狼が話し出す。

「流石です、ご主人様。もうこの辺りの縄張りに臭いを付けてきた

のですか！」

なんだって〜！お前ら犬……そうかありそうだ……ミスった。チラリと周りを見ると老婆達はくんくんして、流石だ……とか。この臭いなら、大なら数日は持つ縄張りも半端い広さだるとか、小物など立ち寄る事もしないだろう。いろいろ、ヒソヒソ話し尊敬の眼差しで見る。やばい、作戦変更だ。

出鼻を挫かれたぜ、作戦の9割が台無しだ。脳ミソで<<緊急事態発生>>ってサイレンがガンガン響く、最終手段をするしかない。発狂して、奴隷はムチでシバクふりをするしかない。俺はカバンから昨夜作った、怪しいムチを取り出し、不適に笑う。<注、そんな趣味は無いです>。

狂人と思わせるしかない。腹に覚悟を決め、雄たけびをあげる

「うおおお〜〜」

地味に雄叫びは気持ち良かった。腹の底から叫んだ事は今まで無かった。実に爽快だ……

「おらあおらあ、うひゃ〜ほい」

バチバチ地面を叩きながら威嚇する、顔を歪め慌てて逃げ出す老婆、ひい〜と避けようとする老婆の動きはまさに妖怪、さっきまで動けなさそうだったのになんて素早い動きだ、火事場のクソ力か？ ミッション成功……すべての人をたたき出す。む……一人いるステラだ。見るからに汚れてる。

俺はステラに向かった。シャドウがどんな生き物か知らないから、

この際観察しようと思った、動けないのか、俺は人形の様なステラの服を脱がす、酷い傷が何箇所も見える。包帯を取ってみると傷が少し化膿してそうだ、ロボットの修理の様にマツパにしながら観察する、いや服から危険な武器が服から続々でてくる。動けないからいいが動けたら、俺は即死だとわかった。

皮膚の中も武器が無いか警戒しながら、全身を指でつつんする、安全確認だ。危険が無いと知ってとりあえずドラゴン先生の肉と薬草で作った薬を傷口にぬる。異常なし、どうも腱が切れてるっぽい、あと酷い火傷だ。外傷は傷が少し化膿してるくらいだ。

ステラも安心したらしい、緊張が緩んでる。酷い傷には、綺麗な布を巻いて、見た目は傷が見えない様に巻き、今だと思い、カバンから俺とオソ口のウサギ皮セット、女性用上下ビキニ、を取り出し体に付ける。通気性、心地よさ完璧の物だ。美しい。脱がした服は洗って武器を取り好みの改造をして渡そう。

しばらくゆっくり眺めて、腹減ってるか？と聞く、静かにうなずく。言葉は分かるらしい、ふとバンパイア系かもと警戒して口を開かせる、歯に牙は無いようだ、なにかある、しかし口が少ししか平かない……顔の全体を両手でなでなでしてるとく注、顔も火傷で酷い、手になにか引つかかる。よく見ると左右の耳の下近くに小さなトゲが刺さってる。

ゆっくりそれを左右抜き取る、なんだこれは小さな釘みたいだ、サラは口を大きく空ける動作をしている。

まさか、サラの口を見るなんか刺さってる、「指をかまないでね」と祈りながら、指を突っ込みずべて取り除く……痛かっただろう。

黙ってうなずくステラ、ドラゴンの肉を満足いくまで食べさせる、こいつは老婆達の魔よけになる、しばらく面倒見るか……腹は決まった。

俺は覚悟を決めた、サラとステラ一緒に住む、老婆たちは老婆の村を作ってもらえばいいのだ。サラを探しながら住民に話す。

「先生も俺の部下ならいいって」

老婆達は喜んだ。まず動けないって思った体が、シン様の雄叫びで甦ったと。失敗だった老婆に雄叫びは狼の号令、群をまとめる声と、勘違いし動けるのになぜ動かないのかと怒られたと思ってる。

本能が働き動く自分達に驚き、俺よりも素早い移動で荷物を整理して出発の準備をしだす、シン様は不安だったステラを裸にして武器を取り上げ、口の中の暗鬼までチェックして私たちの安全を確保した。

なんか目がやばいキラキラ輝いて、ハッキリ話す俺はサラにぞっこんだ。なんか人獣って一夫多妻なのか……なんか全然気にしてないぞー!!

ほとんどの人がすでに元気になっているので出発することにした。

クロの背中に俺とステラが乗り、俺がステラを抱きしめながら、シロには重そうな荷物を運んでもらった。ステラは眠っている……起きてても話さないし動かない。寝息でなんとなく分かった。

「サラ、この辺りは魔物はでないのか？」

「ええ、ドラゴンの巣の周りはめったに魔物は出ませんよ」

「巢の周りってかなり離れてるけど……どのくらいまで??」

「ここは歩いて半日ですが、そうね3日くらいの距離ならほとんど出ないですよ、ドラゴンの巣の近く」

「には魔物は近づかないのよ、だから私達もここに隠れてたんだよ」

「そっか……それで出会わなかったのか」

「ドラゴンの巣の周りで暮らせるのは安全を保障されたようなものなの、シン様は巣を守ってるって話すけど守られていたのかもよ」
って笑う、やっぱりかわいいよサラは、美を感じた。

「そうなのか……」

うなづく、他にもいろいろあり、最初はそれでもたまたま魔物を見たが、戦で怒ったドラゴンが近くの魔物を狩だし逃げ出したらしい……それに最近はこの辺りの魔獣が統率されたようになり巢に近く魔物を食べてるとか……

実はこれは、もともと魔獣の巨狼などのボスであったクロやシロ（こっちは巨虎）が縄張りを守らせていた、しかもクロやシロの抜け殻を食べてめっちゃめっちゃ強くなっていた。

逆にサラとかはかなり危険があったが、シンの人に会いたいって思いを知ってか危険を感じない限り襲わないようになってた。

獣人の中にはシロやクロと会話できる人もいるらしくこんな話を後日聞くことになる。

夕方前には家に着き、夢のマイホームに（実は小さな小屋2部屋あるが1つは倉庫になってる）ステラを寝かせたほとんど動けないので……

悪い菌がついてたらいけないと思い、あの不思議な水で皆さん綺麗に体を洗ってもらうことにした。ドラゴン先生に聞くと不思議な水は枯れる事はないから好きに使っていいと。しかしドラゴンの巢に入って良いのは俺だけと言われた。他の人が来るのはうるさいのでけて入れてはいけないと……

船にあったバケツ大小など（5個ある）を持って次々と外に水を運ぶ……重労働だ……見かねて先生は今回はサラだけ入っていいことになった、前も一度入ってるし。

体を洗うつても風呂などないので布で体を拭くのだ。ドラゴンの巢を汚してもいけないので最初にサラの体を洗うことにした。

スケベ心丸出しで

「サラ背中をふいてあげるよ」

といいながらタオルをしぼる、ポツと赤くなりながら、うなずくサラ、素敵だ。

「シン様、お願いします」

恥ずかしそうに背中を向け服を脱ぐサラ、背中には鞭で打たれた古傷が痛々しく残ってる、背中をやさしく擦ると……あれ??何か変。

ペロって皮がむける、日焼けして皮がむける感じだ少し厚めだ。

「痛くない？」

「大丈夫ですよ」

不思議そうに皮をむいていく、おおお、下から出てくる皮膚は真っ白でしかも鞭などで叩かれた昔の傷後が無くなってる。

「サラ傷が治ってるよ」
「わかってない……」

「だから背中の中古傷がなくなってるんだ」

ペロリと皮を見せる……顔を真っ赤にしながら手で覆う、背中の傷より皮が気になったみたいだ。丁寧に背中を洗いタオルを渡す。

「俺新しい水汲んでくるから、ゆっくり洗って」

嫌われたかな、ここは紳士にしよう。

サラを見ないように汚れた水を捨てに行く。新しい水を汲んでは皆の所に持っていき、汚れた水を捨て汲みに行く、歓声が湧いていく。

一段落ついて皆を見れば……

ピチピチの女性が……ありえん。

元、老婆達が調子に乗って。

「うぶん あはぶん」

てお色気ポーズしてる、絶対だまされんぞ。

しかし凄い見た目100歳くらいが20歳くらいに若返ってる。

ドワーフの人達は若返っても、色気など。

絶句……

神様、幼女がいます大量に……

良く見るとめっちゃ好みの女性とまったく興味ない人がいる半々くらいだ。どこも悪くないし整ってるんだが……あれだ、スバリ美しくない、好みの問題なのかな？まあ、サラがいればいいのだよ俺は。

ドワーフ美人って言うのかな？人獣もそうだけど……美しくないのに同族から絶賛されてる不思議だ。

妖怪と呼ぶしかないなあれは……とりわけ美人とされるのは「ブー長」と心で呼ぼう1番不細工だ。

しかしあれだく抜け殻の肉>やばいな、俺は味見くらいしか食べずに良かったと思っただ……これ以上若返ってたら。

俺や先生は抜け殻だったけど彼女たちは、皮がむけたのか……軽い脱皮だな彼女達も仲間入りなのか。うむ、納得いかねー、まあいつか前より100倍ました。

そんなことを考えてたらシロとクロが獣を啜えて返ってきた、丸々太った豚もどきだ。皆、大喜びで夕食の準備が始まり宴になった。

食事の準備をしている時俺は小屋に戻り、ステラの体を拭くことにした。酷い傷が治るのではないか確かめるのと、今まで一緒に生活してたとしてもお荷物であったのは間違いない、しかも仲間の種族はいないのだ。

心の傷もかなり深いはずだ、同じ隠れ家にいれば気を使って世話や話もするだろうが今彼女らの部屋は大地で屋根が空なのだ、これからは辛くなるかもしれない、俺の家に来たのだ俺が面倒を診よう。

昔を思い出す、キャンプに行くと開放感がある、あれはいつも四角い部屋で過ごしベットで寝る生活が、キャンプではテントが部屋でなくベットだったなあ〜。

ステラに挨拶をして体を洗うぞと話す。

「いや……恥ずかしい」

「そんな年でもないたる……昼も見たし」

ぶつぶついいながらやさしく服を脱がす。

痛々しい火傷が見える……

治る様に祈りながら、やさしく体を洗う。

ペロリと皮膚がむける、かなり良くなってるがまだ火傷の後は酷い……皮膚が萎縮してるのだからハビリが必要だ。

「皮がはげてるけど痛くないかい？」

「はい」

ゆっくり丁寧に洗いながら話しかける。

ステラはびっくりしながら見ている。

「シン様は回復魔法をつかっているのか？」

「魔法？いや」

ドラゴン先生の肉の効果と話す。

「しかし今やってるのは回復魔法だ、見たこともない方法だが……
上級者でもこれはできまい、しかも詠唱もしないでなさるとは」

えええ？？

「魔法とか知らないのですが……どんなものですか？」

「なんと……」

しばらく黙ってたが話し出す。

「記憶喪失でしたね……きっとどこかの国の名のある人でござい
ますよ……魔法はですね」

一呼吸おいて話し出す。ステラが知る最上級の魔法理論、使う人
はいなくおそらくそうであろう魔法の最先端技術だ。こつちでは重
力を説明するのに似てる、知ってるが上手く説明しにくい。

「簡単に説明しますと、心でイメージし魔力を込めて再現する、呪

文とか詠唱はイメージを強化し威力や発動率を上げるものです」

「はあ〜」

さっぱり解らない。

「回復魔法は普通、自己回復のスピードを上げるのです、上級者は他人に自分の魔力や生命力を注ぎ回復をはやめる……魔力などを注ぎ込むイメージを持つのです。シン様が今使ったのは、シン様のイメージで私の体を修復させる。細胞一つ一つに命令してる感じですよ。大きさに言えば手を無くした人の細胞に手を作れと命令し再現させようとしている」

「そうなんですか」

良く解ってない……しかし直るイメージがあった、サラの皮を剥いだ後を見たときから、もしかしたらと。

綺麗な元の状態をイメージしながら体を拭いた、魔法なのか？肉のおかげと思うのだが。どちらでもかまわない回復してくれればうれしいのだから。ステラの体を丁寧に洗い、ドラゴンの肉と不思議な水の食事をして小屋の外に連れ出す。

「シン様〜ご飯ができましたよ〜」

声が聞こえるステラを小屋のそばの椅子に座らして

「飯たべてくる」

と断り晩飯を食べに走る。

皆の浮かれたバカ話を聞きながらステラは静かに笑った。

シンの暖かい魔力で包まれたステラは思った、あの暴れまわったドラゴンがおとなしくなってるのもシンの力だ、もう死にたいなんて思ったらいけないな。なんとしても回復しなければ、セリアは体で解ってた、今までにない生命力にあふれてる、そして回復してるのだ希望を持ち、暖かいシンに感謝した。

夜結局、俺とステラで寝る事となった。俺の家にはベッドが1つしかないので、サラとは明日以降だな。

明日は隣の部屋を掃除してベットをもう1つ作って。ステラの部屋にするか……明日は忙しくなるな。そうだ、ウサギの皮でもう1セット、サラ専用のスペシャル水着セットを作ろう。ごそごそと作業開始する。

「シン様何をなさってるの？」
ステラが聞いてくる、楽しそうに何かを作ってるので気になったらしい。

「ああ〜これ、ウシシ。男のロマンだよ、ステラその服になんか改良点ある？」

よく見るとウサギの皮だ、あきれて話す気も起こらず寝たふりをする、ステラ。

大体型を作ったので寝ることにする、もちろんステラに手は出さない。疲れてたから熟睡だった。

第3話 引越し(後書き)

よろしくお願いします。

代4話 村作り

大変だ~~~~~

とんでもないことが起きた。サラが10歳くらいに若返ってた。

最初は分からなかった、あれ変な子供がいる。

「お嬢ちゃん、どこから来たんだい？」

「シン様、サラですよ、またランクアップしました、うれしいです」

うれしそうに騒ぐサラ確かに前よりも美しくなったが、ためなのだよ、それでは、放心状態の俺……終わった、あと5年、がんばっても3年はかかるだろう。

俺はロリではないのだよサラ、俺の愛から逃れて喜んでるのだね。

サラよ、すまないが心の旅に出るよ、どうしたのお兄ちゃん……男にはロマンを求める熱い心があるのだよ……妄想の世界に入る俺。ああなんて青い空なんだ。

俺の世界をぶち壊す妖怪軍団がやってきた。

「シン様あ~~~~」
「ご飯よ」

おのれ妖怪軍団め！貴様らの呪いかこれは……明らかに声が怪しいぞ、その手には乗らん。

ひそひそ話が聞こえる。

「きつと恥ずかしいのよ」

「初心だね、照れてるのよ」

「もうすぐ我慢できなくなるわ」

キヤーキヤー言つて朝から騒いでる……やつらから俺の童帝サンクチュアリを守るつてみせるぞ。

そんなところで人獣達の家を作ることになった。

家を作るのに大変なのは木の乾燥である、生の木は重くてもてないのだ。しかしドラゴン召還で大量の倒木が出来ていた。後まあ、俺は皮むき間伐つてのを大量にやってたから、皮むき間伐とは杉や桧の皮を木を切らずにそのままベリベリと剥はいでしまう。すると立木のまま木は枯れ一年もすると木が乾燥した状態になるのだ。

皮は並べて道を作つたり、小屋の屋根に乗せたりしてた。そいや、一人で家作れるのかつて思うが重い木等は船にあった三角マストの滑車を使つたり、てこの原理で持ち上げたりした、だからドラゴンの巢の近くの大木の真横に小屋が出来た様になる。

この大木にも見張り台を作ってるが、ただ眺めのよい休憩所ひなんじょになつてた。

まあ人獣達の家のはうは勝手に作られていく若返つた人獣達が木を切り運んでくる。ドワーフ達が器用に木を加工していくのだ、本格的な家が作られていくのだいや、凄いや、パワーが違うのだ。

今の俺の心の支えはステラになった。

夕方、ステラの体を洗う又ペロリと剥げる。

結構快感だな、化粧の顔パックを剥がすのに似てる、中から美しい肌が出てくるのだ。この日はさらに回復して火傷の痕がほとんど消えて酷い場所くらいになった。元々綺麗な顔立ちだったが、傷が治ると、やはり美しい。ゆっくりなら歩く事もできる。

「後2日もしたら火傷の痕はきえそうだ」

今日も同じ様にドラゴンの肉と不思議な水を食べさせ外にでる。

食事の準備をしているので手伝うことにした、火をつけようとカセットコンロを持ってくる。俺はカセットコンロを大きなライター代わりに使いガスを節約してるのだ。

割り箸くらいの木の枝を用意して先を割って乾燥した草などをはさみ火をつけたらすぐ消す。

効率が良かったのは松脂で松の木の根元などに樹液がついてる、それを枝につけて置くとなかなか消えない、また豚もどきなどの中から取れる油も使った、薪の節約にもなるし、ただ黒いススが出るので焼肉などでは使わない。

ま〜そのカセットコンロが彼女らから見れば不思議なアイテムなのだ。古代の遺産とか神のアイテムとかいいだす……面倒なのでガスを抜いて渡した、ドワーフ達は不思議そうにずっと眺めていた。

晩飯を食べ終わるとドラゴン先生の所に話しをしにいく、結構疑問なことが多すぎるのだ。

抜け殻の事や魔法の事などだ……抜け殻については先生も興味があるらしく話にのってくれた。ドラゴン先生やクロやシロは魔力が高いので抜け殻もかなり魔力や効果があるが、隠れ家の人達の皮はほとんど効果はないらしい、俺は思った、きつと妖怪の呪いだ。

言葉について聞くと、先生が俺の抜け殻を食べた時、俺の意識（人格や知識）も先生に入ったらしく、日本語が話せるようになったらしい、昔のままなら丸呑みしてたと……ひいいい。

そしてあの契約がお互いの、意識を強く結びつけるものであると、「シン今日日本語で話してると思ってるがこちらの言葉だ」

「ええええ〜？」

「最初に一度通訳の魔法をしたらだろ、あれは1日も持たないものだよ」

びっくりする俺、

「シンの中にある私の知識を引っ張り出した、思い出させたが正しいか」

忘れてた記憶を思い出すようにそのきっかけを作り後は自然に話せたらしい。

気がつかなかった……

だから魔法が使えてもおかしくないし、この若返りの力はシンに

共鳴するから（ドラゴンの若返りが20台になったように）魔力を注げば回復は脅威的になると。それに契約の時、召還と言ったが厳密には、違うらしい召還は異世界の生物などを呼び出すが、同じ世界にいるのを呼ぶのは、転移魔法らしい。シンは異世界から着てるから召還もできそうだが……まあ今は力が無さ過ぎるまだまだ、修行せんとな……この転移魔法も普通ならかなり上級者がやっと使えるのだが、共鳴ってやつらしい。

簡単な魔法も教えてもらった。ファイアやアイスだ、あとサンダー。

サンダーは使える者がほとんどいないらしいが使えるはずだと、先生サンダードラゴンですものね。

翌日、朝から魔法の練習だ。

「ファイア」

……無理、朝から百回以上唱えてるが何もおきない。

「シン様 お昼ご飯ですよ」

サラが呼んでる、

「はい、すぐ行く〜」

いや〜〜かわいい、食べてしまいたい、いかんいかん。

ご飯を食べ、小屋に行くステラに会うためだ。

魔力がわからないので、試してみるのだ。

回復魔法なら出来ているみたいだからそれを使いながら魔力を知る為だ。

もちろんステラの回復の為でもある。

「ステラ、魔力の使い方がわからないんだ」

「そうですね……最初はわからないものですよ」

「な〜ステラなんかいい方法ないかな……」

「そうですね、感覚なら私が教えられるかもですね」

「シン様、手を出してください」

ステラの手に俺の手を重ねる。

「目を閉じて手に集中してみてください、これから魔力を送ります」

ドキドキするけど、特に変わった感じはない……

「すまない……解らないのだ」

「……そうですね、シン様 魔力を強く送る方法が他にもありますが、お話ししますか？」

「それはどのような方法だ？」

少し恥ずかしそうに下を向くステラ。

「それは……口づけとかその他は……」

あれだ俺は、さとった。

あれですね、あれ、大人の関係になるのですね、

「そ、その他でお願いしよう」

俺はやる気まんまん、美しいセリアとついに……

「わかりました。準備しますね、目を閉じてお待ちください」

心の中で、女性の準備つてのがいるのだろ。よいよ、いくらでも待ちます。

しばらくしてステラがそばに座り手を触ってきた。

ゴクリ、息を呑む。

「シン様、力をぬいてください」

自然と力が入ったようだ、いかんいかん、なんせ初めてなので、力を抜く。

ブスリ、

痛いぞ、かなり痛い……なんだ??瞬間的に目を開け痛みのある場所を見る。

絶句……

腕に短剣が刺さってる……ひいひい。

傷は浅そうだが頭は真つ白だ。

さっと短剣を抜き、回復魔法を唱えるステラ。

「シン様、目を閉じて魔力を感じてください」

痛みはすぐに消え、ステラの魔力が傷口から注ぎ込まれてるのがわかる。

おおなんか分かる、暖かい懐かしい春の木漏れ日みたいだ。そして貴女あなたがとても危険な存在だとも……無念。

傷は見る見る回復して傷は綺麗に消えた。

「ありがとう、ステラなんか解ったよ」

「すみませんシン様、魔力を知るとはいえ傷を負わしてしまいました」

「いや 気にする事はないよ」

俺の大きな勘違いだったのが急に恥ずかしくなった、アブね危なすぎる。

回復魔法の練習としてステラの体に全身マッサージのように魔力

を込め体を揉み解す。これは特権だな……大満足だ。

早く回復して夢のマイホームから出て行ってもらわなければ落ち着きやしないのだ。

次の朝にぎやかなのでどうしたの？って聞くと、ステラが完全に回復していた。

俺も大喜びしたが……特権が無くなってちょっと、しょんぼり……まあいい危険な可能性が高いのだ。

ステラは戦闘に強く剣や弓など一通り使えるらしく剣術や体術を教えてもらおう事になり。

毎日稽古するようになった。あと基本的な魔法や文字、世間の常識を習う事になった。文字や簡単な魔法はすぐに覚えてしまった、ドラゴン先生の記憶だろう。

やはりステラ危険な女だった、かなり強い。

あとステラにすごい魔法を教わった。

それは転移魔法のインチキ技だ……倉庫とカバンに魔方陣をドラゴンの肉を使って作り物を移動させるのだ。ためしにやってみたらうまくいったので大喜びだ。

これで重い荷物も倉庫に一瞬で運べる。ばらしい

この成功をきっかけに俺の野望は大きく膨らんだ。

こんな原始的な生活でなく高度な文明をここに入れて、サラと暮

らそう。

早く強くなって町に行きたい自然と修行に身が入る。

魔法の方は簡単な魔法で「ファイヤー」って唱えて人差し指から小さな火が出るようになったり、「スパーク」イメージはスタンガンだ手に青白い電流が走る。みたいな変な魔法ばかり覚えてしまった。

「アイス」ぽろりと小さな氷が出来る、コップに入れて飲む……なんか違う、実際に見た事は再現しやすいみたいだ。多分攻撃魔法は何回か見れば使えるはずだ。

ドワーフにドラゴンの肉と薬草で良く効く薬をのレシピを聞き大量に作った。正露丸みたいだなこれ。肉としての使い道より、薬のほうが良く効くし食べ易い。

「最近、シン様見ないわね」

「さつき、うり坊、捕まえて育てるって、ニコニコしながらどこかに行きましたよ」

「シン様最近いろいろやつてる見たいですよ。薬草の生える場所を増やしたり、実が生る木を増やしたり……この前はつる芋の種を他の場所に植えてたり」

「あゝ私も見たく、なんか隠れる様にしてたけどトマトベリーの苗を持ってこそそしてた」

「食料不足の前に、増やしてるんだね。流石ですわ」

その頃、俺は新魔法の開発の為、朝早くから夜中まで急がしく働いてた。

彼の目的は新魔法でサラの成長を早め一気に大人まで戻す事だ。ドラゴン先生が大きくなったんだ、できるはずだ。

あった、あれがメロミツバチの巣か、蜜蜂と変わらないな、飼育できるかやってみるか。まず、この痺れ草を燃やして煙で麻痺させて、巣を木箱に移して女王蜂を戻すつと。

巣箱に麻痺した女王蜂を丁寧に入れる、んで、ドラゴンの薬1万倍薄めた液をちよつと飲ませて、いくぜ新魔法、

「成長フェロモン！！」

よし！次は働き蜂だ……彼はドラゴンの薬を作り、容器を洗った水を貯めて、植物や動物、昆虫など食料になる生物に与え成長フェロモンの魔法をかけまくっていた。

この効果は絶大で木の実、豚やウサギなど大量に増え働き蜂は本気で働いた。ただ彼は知らなかった。

成長ホルモンとフェロモンはまったく違うことを……実が生りそれを食べた人は！？それはしばらく後に起こる。

そんな頃問題が出てきた。

塩などの調味料がほとんどないのと大鍋みたいな調理道具がないのだ。食が偏るのも良くないと思い買いに行こうと話したが……い

きなりこの森を出るのは厳しらしく外には魔物がいっぱいらしい。

とりあえず戦場跡地に行く事になった。

俺は町に行く気満々だったがまずは近くか、しょうがない……

代4話 村作り（後書き）

よろしくお願いします。

第5話 戦場跡地

戦場跡地には、俺とステラで行く事になった。

他の住民は戦闘経験がないので危険だからだ。

場所は南に3日ほどの距離らしい……ちょうどドラゴンの縄張りから出るか出ないかのぎりぎりらしく

いつ出会ってもおかしくないなので、十分に気をつける様にと念をおされた。

「サラ行つて来るね」

笑顔で握手する、俺は少し力を入れギュツと握る、サラもゴキ……

「すみません……ランクアップで力の加減が」

「大丈夫……慣れるまでしょうがないよ……じゃ」

痛つて……サラも危険だな、今のうちに教育しないと……

「シン様 気をつけてね」

・ 3 ・

シロとクロに乗って走る事1日……疲れた。

日がくれたしたころ戦場跡地に着いた。

1年ほど経ってるがその時のまま残ってた。

「やっと着いたな、意外にそのまま残ってるので使えそうな物は沢山ありそうだ」

ステラは辺りを見ながら満足したようにうなづく。

「今日は疲れた早めに飯を食べて休もう」

俺はこわばった体を伸ばしながら居心地の良さそうな場所を探す。

「シン様、何をしておられる」

キャンプの準備をするために木を集めると声がかかる。

このような森の中で火を焚くのは危険らしい、なるべく小さく火をつけさつと料理してすぐ消すのだ。魔物は火を恐れるが火の近くには人などがいる事を知っている。町の街道沿いなどは、魔物も恐れて近づかないが、こんな魔物の巣みたいな場所は火は危険らしい。

ステラは森から桧の枝みたいな物を取ってきて葉を潰し体に塗っている。これはにおい消しらしい、あと虫除けにもなるみたいだ。

俺もステラに習って同じようにする。

近くに簡単な罫をいくつか仕掛ける、転び易いようにロープを張ったり別な場所で音がするような罫だ。寝る場所は背後を守る為、木や岩の近くで隠れる様に眠る。夕食前から水は控えて小便をしないでいいようにするなど……全然休まらないよこれじゃ。

それに期待してた甘い夜なんて無い事が分かった。

ステラに野宿を教わりながら戦場跡地の探索が始まった。

戦場跡地は意外に死体などはなく、焼け野原に少し草が茂ってる感じた。所処に大きな岩やこげた倒木がある、結構広い陣だったみたいだ。遠くまで見通がよい。

しばらく行くと、武器置き場らしき場所があり鎧や剣などが見つかった。

使えるかどうか解らないがそれらをカバンにどんどん入れて倉庫に送る。後で修理すればいい。資材置き場にはいろいろあったが、ほとんどが使い物にならなかったが、木の箱や丈夫な布に包まれた中には、新しい服や布、ロープなどいろいろある。釘や金槌、スコップ、鉋や鎌、鉄がしっかりしてる物は全て送る。

そしてついに見つけた料理場だ。

「ステラ、塩があったよ」

丈夫な布の袋に塩の結晶がいくつもある、かなりあるな。

大鍋が見つかった時は大喜びした。

調理器具も全て送った。木は腐っても鉄の部分がしっかりしてたら修理できるからだ。そして幸運な事に小麦やジャガイモなどが野生化して生えてるのを見つけた。

この気候はほとんど夏に近いので収穫時期が決まってない。

小麦の苗を土ごと取って送ったり、生えるか不明だが種も送った。ジャガイモとにんにく、唐辛子、たまねぎも見つけた。

もちろんドラゴンの薬1万倍液とフェロモン魔法をかけて送った。

死体を見つけたら鉄の装備などははずして1箇所に集め燃やした。ステラはいつも最後にお香のようなものを燃やして死者の為に祈った。そのままだとアンデットになるかも知れないからだ。

・ 3 ・

3日後

使える物がないか探してみると、遠くで声が聞こえる。

そちらを見ると、6人PTのやつらが猪を狩ろうとしてる。

子供みたいに小さい、なんだあれは！？ステラに聞く、

「あれは、ゴブリンの子供だな」

あれがゴブリンか〜眺めてると、あつやられた……ゴブリン達は全滅した。

あまりに弱いので見に行ってみた。うん、醜いな、しかしあの老婆よりましだ。

棒でつんつんしてると、

「おい、お前たすける」

よく見たら怪我をしてるが、死んでない。ゴブリンなんて生命力
！！

「おおー！ゴブリンがしゃべった、すげー」

「いいから、たすける」

「あれだろ、助けたら襲ってくるだろ、それに、かわいくない」

そうか……じゃあな……

「少し話だけでも聞いていけ、話せるゴブリンなんて珍しいぞ」
と言って話し出した。

わらわの名は、アセリーノ・ゴブリン・三千三世、3日前に生まれ
れた女王だ、名門中の名門エリートゴブリンだから、言葉も話せる
のだ。わらわが生まれた次の日悪夢が起きたのじゃ、伝説の魔獣、
白虎が住処に襲ってきた。父や母を始め全員で勇敢にも戦おうとし
たが、一瞬で全滅してしまった。

運よく生まれたばかりの、私達6人が生き残った。

今日、国を再建しようとして、わらわが女王となって初戦で全滅した
のじゃ……無念じゃ、

「さあ、わらわの首を取って武勲にしてよいぞ」

なんて間抜けなやつらだ、武勲にはならんし、犯人はシロか、助

けてやるか。

「仲間は、お前らだけなのか？」

「そうじゃ」

「しょうがないやつらだ」

瀕死のゴブリン6匹集めて、ドラゴンの薬を飲まして、回復魔法とフェロモンの魔法をする。明日赤ん坊になってたら大笑いだ。しばらくシロとクロは遠くで見張ってもらおう。

「すまぬ助かった」

「」「」「ありがとうございます」「」

「しばらく、ここに泊まるからお前らもここにいる。その間に強くなれ」

「」「」わかりました」「」

「まず、お前たちは弱い、猪なんて無理だ。まずは小物や木の実など取って生きる事を覚えろ、油断や焦りは禁物だ。分かるかアセリ」

「すいません」

この辺りの木の実や薬草、毒など教えながら採取する。

ここも3日目なので安全と見て普通にキャンプする、そして2日

前に教わった、野宿の仕方をいかにもって感じに話す。

こっそりクロが取った猪を持って帰り皆で焼いてたべた。

ゴ布林達は、ステラを見てびびりまくってた。

「変な動きしたら、殺すわよ」
って、ニヤリ、俺もびびった。

翌朝……ゴ布林達は普通だった。赤ちゃんにならなくて、よかったね。

こいつらのPTをゴ布林・シックスと名づけた。

適当にさびた武器を拾って少し稽古する。

ステラが教えるんだけど皆で聞く、もちろん俺も知らないからだ、まあ剣や槍や弓などいろいろな武器の簡単な説明と使い方だ。

昼飯を食べ、その後はゴ布林達は、狩をしにでかけた。

俺達は使えそうな物を探しながら燃えるものは燃やした。

死体や古くなったテント、人工的に作られた物は燃やすのが一番いいらしい、そのままだと悪い気が集まりやすくなり魔物が増えるぞうだ。

ゴ布林達を見るとクモなど昆虫をむしゃむしゃ食ってたりするので、あまり見ないことにした。

夕方、ゴブリン達がうさぎを3匹取って帰ってきて、シン先生、やったよ、ほめてほめてと集まってきたが、かわいくないので、皆で分て食べるとウサギを渡す。

ゴブリン達は、ウサギを滅多切りにして、毛が付いたままモシヤモシヤ食って、ウサギうめうめと叫んでる。

その姿が老婆達を思い出させ、背中が冷やりとしたので、このままだといかんといい、少し教育することにした。

「バカモン、それじゃただのゴブリンと同じだ。エリートゴブリンはもっと、おしゃれだと聞いたが」

まったくの嘘だがまあいい。

「ええええ??」

俺は残り2匹のウサギの皮を剥ぎ、味付けして、こんがり焼いて渡した。こっちの方がうまいだろ

「うめー」

その味に感動して今度からそうすると、うなずいた。

そして、火の魔法を教えたらなんとか、アセリーノが出来た。

練習したらもっとでかくなると教えておく。俺できないけどね。

俺のカバンから昔とっていたウサギの皮と交換して（流石に生では加工できないので）ちゃんと説明しながらアセリーノの水着を適

当に作った。

適当ビキニ、スタイルに恥じない出来だ。

目も痛くない、このぼろさ加減がしっくりくる。

「アセリーノ、女王なのだから身だしなみも気を付ける様にと汚い体をさっさと洗えとタオルを渡し、綺麗になったら、水着を投げ渡した。

他のやつらも、俺も、私もほしーいって顔してるので、明日取れたら作るうと話た。

「明日はがんばって取るぞ〜おおー!!」「」

ゴブリン・シックスに輪が出来た。

ついでに毎日体を洗い、歯を磨くなど教え回復とフェロモン魔法をした。

ゴブリンは馬鹿と思ってたがこいつらは優秀だ。

次の日、朝ご飯を食べ訓練して昼飯、それからゴブリン・シックスは狩に出かけた。

夕方、7匹のウサギを取ってきた。

シン先生やったよ〜ほめてほめて、とくるが、やっぱり、かわいくないので

「スキあり」

ペチつと棒つきれで叩いてやった。泣きそうだったので、すぐに回復魔法をして、よいシヨした。

6人とも傷だらけなので回復とフェロモン魔法をして、汚い体を自分で洗えとタオルを投げ渡して洗わす。

汚いとまたペチつとやって体で覚えさせた。文句を言いそうだったが、

「お前達はゴブリンの中のゴブリン、エリートゴブリンだろ！その誇りを忘れるな！！」

「……はい、シン先生」「」

「よし！！ウサギの皮剥ぎ、やるか！！」

皆で皮を剥ぎ、ゴブリン達に味付けをさせて、焼いて食べた。

味付けのうまいやつ2人にコックをしると命令し、皮がうまく剥げなかったやつは、薪でも拾ってこいと命令した。

やはり器用、不器用があり、出来ないやつはひどかった。

器用なやつに服の作り方を教えながら、5人の服を作って渡した。

顔は不細工だがマシになったな。しかしフェロモンの魔法が効くのか見る見る成長する。

今日はこつそりクロやシロが取った猪が大量だったので一つだして、丸焼きにして食べた2日は持つだろうと思ってたが次の日の昼には食べきった、すごい食欲だ。

次の日、朝稽古をして罾の作り方をいろいろ教えた、落とし穴を作り追い込むやり方や、待ち伏せなどだ。

ゴブリン・シックスはやってみるって張り切って出て行った。

夕方、うっほ！うっほ！かけ声と共に木の棒に鹿を吊るして帰ってきた。

俺を見るなり4人が走ってきてシン先生やったよ、やったよって騒ぎ出したので「ばか者！！」ペチッと叩いてやった。なんで？って顔するから

「鹿を持つてるのは2人だ、あいつらは手が使えない、今攻撃されてみる、2人は死んで獲物も取られるかもしれない、4人は前後左右で敵を警戒しながら2人を最後まで守るのだ、それがPTだろ、お前達は6人しかないのだ、1人怪我でも大変になる仲間を大切にして無理はするな！！」

話すと4人は、しょぼーんってしたので、6人がそろったら

「よくやった、流石エリートゴブリンだ」

と少しほめてやって回復とフェロモン魔法をした、皮を剥ぎ肉を解体して、タオルで体を洗わせ保存食の作り方を教えた。

しかしビックリだ。鹿、俺も初めてだったから、皆でシカうめー

っと叫んでしまった。

次の日、訓練とPTの戦い方、3人を前衛、剣や斧と盾、後衛が3人が小型の弓や槍がいいと教えた。

その辺は皆で話して決めると言ったら、アセリーノが私は魔法で行くと言い出す。

やらせてみたら、かなりよかつたので魔法になった、でも短剣などで訓練は毎日するように教えた。

ゴブリン・シックスは張り切って出て行った。

3時頃、見るも無残にボコボコになって帰ってきた。ピンクダチヨウにやられたらしい。

あと少しと思った時に背後からもう1匹羽、来たらしい。

正直ほっとした、無事帰った事と1度は痛い目に会わないと、いつか酷い目に会うからだ。

今日は仕方なしに回復の水で綺麗に拭いてやって傷口に薬草を塗りドラゴンの薬をかなり薄めた水を飲み、回復とフェロモン魔法をした。

夕方には、ほとんど良くなった。

晩御飯を食べながら反省会をした。

まず周りに敵が何匹いるか知ることから、敵の弱点は何処かとか、

いつも回りに気配を配るなど話てたから、言ってる間違いではない、しかし、その前に、君達は弱いのだよ。

「ばか者、戦う前に最悪の時を考えろ、逃走経路をまず考えるのだ。絶対に逃げれる道だ。死んだら終わりなんだ、逃げるのも勇気、逃げ道に罫を仕掛けて置くのもいい。まずは生きて強くなるそれからだ。」

厳しくしかった。

「……はい、分かりました」「……」

今日は早く寝よう。しっかり反省して明日の力になればいい。

次の日、朝飯をしっかりと食べ、状態を見る、めっちゃ元気だ。回復半端ねー!!!

訓練して怪我の直し方や、毒の時どうするとか、骨折時の処置などを教えた。

昼飯をたべ、ゴブリン達は狩に出て行った。

夕方、周りを警戒しながら、ゴブリン・シックスが帰ってきた。猪を担いでる見事だ。

「……シン先生やりました」「……」

振り返り際に木の棒で……スカ!?見事、誇らしげなゴブリン達の顔を一人一人見る。

「うむ……やっぱり、かわいくない。」

「よくやった」

猪の皮を剥いで肉をばらして、焼肉パーティーをする。

「……うまー……」

笑顔もやっぱり不細工だった。しかし、にぎやかに食べた。

「お前達はまだまだ弱いが、生き抜く力はもうある。明日が最後の修行だ」

次の朝、訓練してお別れの挨拶をする、

「もう、お前達の住処に戻っても大丈夫だ。そこで国を再建しろ、俺は北に3日行った所にドラゴンの巣がある、その巣を守ってる。もしなにかあればそこに来い。」

「……ドラゴン……すげー……」

「しかし、緊急でない限りここより北には行かない事だ。ここからドラゴンの縄張りだ。これを渡す、これを見せればドラゴンも話が分かるはずだ」

壊れたルアーで作った首飾りをアセリーノに渡した。針は折れている。

キラキラ輝く魚の首飾りを見て、皆、すげーすげーと言って、感動で泣きそうだった。

「世界に1つしかない、珍しい物だ。大切に守れ」

「……はい、先生」「」

後、釣り針が入ってた入れ物に、ドラゴンの薬を1個を10個に小さくした、小さな薬玉60粒を渡した。

小さいゴブリンには普通じゃ効き過ぎると思うからだ。

「これはめったに手に入らないドラゴンの薬だ、怪我や病気などで重症な時1つ飲め、大切にしろ」

「……ありがとうございます」「」

後は戦場跡で拾った、ぼろぼろ武器を適当に渡した。

ゴブリンの住処はクロとステラに掃除してもらったので、死体などはないはずだ。

「……さよなら、シン先生」「」

「おう、毎日訓練して絶対、死ぬなよ……」

涙の別れをした。しかしゴブリン・シックスはすごすぎたな！勝てる気しね……

ドラゴンの薬とフェロモン魔法の効果か、その後、大繁殖してその名を成す事になる。

戦場跡も大体片付いたし、明日帰る事にした。

ゆっくり昼飯を食べてから、のんびりしていると人の気配がする。

そこにはいかにも戦いなれた感じのドワーフが立っていた。

俺は警戒しながらいつでも剣が抜けるように体を動かしながら話かけた。

「ドワーフか、魔物かと思ってびっくりしたよ」

「若いの警戒せんでいい、騎士でもなさそうなので、なにもせんよ
人懐っこそうに笑う。

「騎士だとなにかあるのか？」

「脱獄兵になるからのう……まあこの戦じゃ罪も軽いと思うがの」

「なるほど、大変だなおっさんも……前に会ったやつにも騎士と間違われたしな」

「ほー前に会ったとは……どんな人であったか いや すまん人を探しておつてのう」

俺は出会った事を話しここに食料を探しにきた事も言った。

「なるほど、そうであったか。しかし、お主嘘が下手だのう」

「嘘などついていないが」

ドワーフのおっさんの何処にこんな殺気があったか解らないが、いきなり襲ってくる。

「シャドウを従えてるのは貴族だけじゃ」

ドーン！

突然の殺気で一瞬遅れる。

「シン様、危ない」

背後から声が聞こえて岩の影から出てくるステラがドワーフの1撃を止める。

「大地の精霊よ、絡み取れ！！」

ドワーフの呪文と同時に俺を蹴り飛ばすステラ、

「ステラ！？」

振り返るとステラは土の牢に入っている。

「貴様ああ！！」

俺は腰の剣を抜きドワーフに切りつけるが、

ガシャン！？

異様な音と共に剣が砕け散る。

ドワーフの戦斧は俺の剣を砕いたのだ。

砕けたと感じた時にはロングソードを手放し身をかがめて短剣を
手にもう1歩踏み出した。

短剣の距離、後は素手でないと無理な間合いまで一気に迫った。

バキン！！

短剣がへし折られた！？

ドワーフは戦斧の勢いを殺さず、戦斧だけを手の中で回転させて
目の前の短剣をなぎ払ったのだ。

一瞬殺気が目の前をかすめたので、手がわずかに止まったが。

そのまま刺せば片手を持っていかれたにちがいない。

とっさに短剣を手放し俺はさらに踏み込み素手の拳に「スパーク
！！」と念じ放った。

青白い電流が拳を包むと同時に相手のわき腹に打ち込む。

バチバチ！！音と共に吹き飛ぶドワーフ。

イメージはスタンガンだ、人には初めてだったがうまくいった。
しばらく動けないはずだ。

「お主やりおるのう」
「って起き上がったきた。」

ゾンビがおっさん！！

ステラも捕まってるし、仕方ない……

両手を地面のつけて叫ぶ。

「シロ、クロ 召還」

左右に青白い魔方阵が浮かび、中からシロとクロが出てくる。

こんな事しなくても呼べるのだが、とにかく見た目がかっこいいのでやってるのだ。見た目がね。

ステラを守るように移動しながらカバンから武器を探し取り出す。

さびたロングソードだった、渡し忘れたか……無いよりましか。

相手をにらむ……

えっ？

「すまん、すまん ガハハ」

と笑いながら武器を捨てて座り込む、殺気が抜けて子供のようにクロとシロを見てる。

「ならステラを開放しろ！！」

「本当にすまなかった」
と、いって頭を下げる。

背中にステラ気配がする。

「ステラ大丈夫か？」

「はい、シン様」

何処にも傷はないようだ。

「白虎に影狼か……信じられん」

ぶつぶつ言いながらドワーフは不思議そうにしてる。

「突然どうしてなんだ？」

俺は聞いた

背後にシャドウがいたのに気がつき、何処かの貴族と思い捕まえて真実を聞こうと思ったらしい。

最初の1撃は殺気を込めたが、手加減してあり出てきたシャドウを捕らえる為だったと。

普通の貴族なら、腰を抜かすか逃げ出すらしい。

それなのにおぬしはシャドウを見て激怒し攻撃してきた。

そんな人間は今まで見た事なく、恋人を奪われたような顔だった

らしい。

シャドウは見た目から黒く魔のイメージが付き易いからめったに人間の前に姿を見せない種族で、しかも暗殺や諜報に長けてるから、国が一部の貴族が裏で奴隷を買い育ててるのが常識らしい、一般人は見るだけで怯えるほどだ。

ステラやはり危険だったか。

おかげで殺されそうになったが……ガハハって笑った。

「おぬしの剣に殺気がなかったのてたすかったよ、人を殺した事がないだろう」

「はい、人殺しなんてしないですよ」

「なるほど、だから助かったか最後の魔法は殺さない威力だったか、剣はシャドウに習ったのか？」

「そうです」

素直に答えるクロやシロが警戒してないから、信用できるみたいだ。

「なるほどな、あんなやり方は普通しない！捨て身の攻撃だ、生きたいなら生きる剣を学べ」

殺さないのに、もっとも効率のいい動きだったらしい。

ゴブリン・シックスに言った事を言われてる気がする。

ステラに、「このじいさん大丈夫かと聞けば

「信用できる」

と話したので「このじいさんを信じる事」にた。

第5話 戦場跡地（後書き）

よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3632z/>

クラゲと俺とドラゴン先生

2011年12月16日01時50分発行